

V 教育課題

第12分科会 自立と共生

○ 研究課題 ○

自立や共生の実現に向けた特別支援教育と環境教育の推進における校長の在り方

■ 分科会の趣旨 ■

我が国が目指している社会は、互いの人格と個性を尊重し支え合う共生社会である。その実現のために、小学校教育においては、自分らしさを大切にしながら、夢や希望をもって「自立する力」を育むとともに、一人一人が仲間として支え合いながら、より良い社会を築いていこうとする「共生」と世界中で深刻化する環境問題の課題解決に向かう自然との「共生」の態度を養うことが大切である。

学校においては、障がいの有無に関わらず誰もが相互に尊重し合える共生社会を築くために、障がいのある子どもの自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する必要がある。このような視点に立って、子ども一人一人の教育的ニーズを把握するとともに能力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服できるような指導及び支援を行うことが重要である。これらのことは、特別な教育的支援を必要とする子どもが在籍する全ての学校においてなされるものである。

また、環境汚染や異常気象、自然災害の多発等の地球環境の悪化を受け、環境破壊の抑止、生物多様性の保全等の地球環境保全の考えに立ち、自然環境の保護・整備や循環型社会の形成に向けた意識改革を図り、かけがえのない地球全体の環境保全に取り組む意欲を高め、能力を育成する環境教育の推進が望まれている。

ここでは、全教職員が「自立と共生」の社会づくりにおける特別支援教育や環境教育の役割について共通認識に立ち、一体となって推進していく校内指導体制の確立や、家庭・地域・関係機関との連携等を進めることが重要となる。

本分科会では、子どもの自立を図るための特別支援教育や、「持続可能な社会」の担い手を育む環境教育を推進するための具体的な方策と成果を明らかにする。

■ 研究の視点 ■

(1) 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

障がいの有無に関わらず誰もが相互に尊重し合える共生社会を築くため、学校教育において、積極的に特別支援教育を推進していかなければならない。そのためには、障がいのある子どもの状態を的確に把握し、教育的支援を必要な時に提供することにより、その能力を十分に発揮できる環境を整えていく必要がある。

校長は、特別支援教育の理念や指針を理解し、校内支援体制の充実を図るとともに、関係機関等との連携を強化し、全ての子どもの自立と共生を目指し、特別支援学級と通常の学級の双方の担任の専門性の向上と授業改善を図らなければならない。

このような視点に立ち、子どもの自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する特別支援教育を推進する上での、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

(2) 持続可能な社会の担い手を育み、教科・領域との関連を図った環境教育の推進

自然環境を大切にしようとする子どもの意識と意欲を高めるためには、身近な環境問題に関心をもたせ、問題を見出し、考え、判断し、より良い環境づくりや環境の保全に主体的に取り組む態度と能力を育成しなければならない。また、子どもたち自身が、自分は被害者であると同時に加害者にもなり得るという認識をもって、人類の一員として自然と共存できる持続可能な社会の担い手であることに気付かせることが必要である。

学校においては、総合的な学習の時間を中心に各教科、道徳、特別活動などとの関連を図るとともに、体験的な活動も重視しながら家庭・地域・関係機関との連携を図り、実践を進めていかなければならない。

このような視点に立ち、学校全体で取り組む環境教育の推進と指導体制づくりにおける校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

研究
発表

自然環境を大切に作る心と実践力を育てる 環境教育の推進における校長の役割と指導性

小樽地区 小樽市立塩谷小学校 堀 智 行

I 趣 旨

今日、地球温暖化や自然環境破壊、資源エネルギー問題等、地球的規模の環境問題が存在する中、地球資源の効果的利用や環境負荷の最小限化を図り、全ての人々が健康で文化的な生活を営むことができる「持続可能な社会」を構築することが求められている。そのため、今日の環境教育は、「環境」に加え、新たに「経済」「社会」「文化」なども視野に入れた「持続可能な社会」の形成者の育成を期すことを目的としているといえる。

学校教育においては、環境に対する豊かな感受性や環境に関する見方や考え方を育むとともに、環境に積極的に働きかける実践力を育てることが求められている。このような力を育むためには、身近な問題を体験的な活動等を通して取り上げ、地球規模の問題につながっていることを総合的にとらえさせるような指導の工夫が必要である。

そこで、本市校長会では3か年計画を立て、小樽市の全小学校における実態を調査するとともに、明らかになった課題をもとに、環境教育の推進と充実に向けて、校長の果たすべき役割と校長としてのリーダーシップの発揮はどうあるべきかについて究明していく。

II 研究の概要

1 研究主題の設定

【研究主題】

自然環境を大切に作る心と実践力を育てる環境教育の推進における校長の役割と指導性

(1) 主題設定の理由

小樽市の各学校では、「小樽市学校教育推進計画」をより具体的に実践化するために、教育委員会が示した「23の指針」(以下、「指針」)に基づいた学校経営を推進している。校長は、「指針」を踏まえ、自校の状況や学校課題に基づく明確なビジョンをもちながら、「共通性」と「独自性」のある、創意と活力溢れる学校づくりを目指して取り組んでいる。

小樽市小学校長会では、全市的な視点から「小樽市学校教育推進計画」の重点目標「社会の変化に対応した教育を目指す学校づくり」を踏まえ、「指針」の実践

項目の一つである「地域の自然環境に目を向けた環境教育」を充実すべく、上記研究主題を設定し、環境教育の推進に関する研究を進めているところである。

(2) 研究計画

- | | | |
|-----|---------------------------|----------|
| 1年次 | 全市アンケート調査等による実態把握
実践交流 | (平成29年度) |
| 2年次 | 実態を踏まえた実践・改善・充実
実践交流 | (平成30年度) |
| 3年次 | まとめ、発展 | (令和元年度) |

(3) 研究の視点

研究主題の究明を各学校における学校改善に向けた取組の一環と重ね合わせるため、研究の基本的な方向を示す視点を次のように定めた。

- 視点1 学校の教育活動全体を通して取り組む環境教育の推進
- 視点2 自然を大切に作る心と実践的な態度を育む環境教育の推進

2 2年間における市内の環境教育の改善状況

各学校の環境教育の推進状況を明らかにし、共同研究としての取組を推進するために、市内全小学校(18校)にアンケート調査を行った。結果の交流を通して環境教育の充実へ向けた校長の働きかけが行われ、市全体で取組の推進が図られた。

以下、環境教育における市内の状況である。

- (1) 各学校が環境教育を学校経営の重点的取組や学校評価に位置付ける学校が増え、これまでの取組の見直しや新たな活動につなげるなど、活動の充実が図られてきている。
- (2) 環境教育の全体計画は、全ての学校で整備されたが、年間指導計画の作成については十分ではない。教職員が主体的かつ組織的に実践できるように改善していく必要がある。
- (3) 各教科等との関連を図った実践も見られるが、環境教育は、総合的な学習の時間や理科、生活科で行われている学校が多く、各教科等との関連を図った環境教育を推進していくことが課題である。
- (4) 本市での実施内容を環境省「授業に生かす環境教育」の4つに分類すると、「自然・生命」83%、「ゴミ・資源」61%、「ともに生きる」44%、「エネルギー・地球温暖化」57%の実施内容となっている。特に、自然環

境に恵まれていない市街地での環境教育の実施に課題が見られるため、実践交流を通して従来の活動に環境教育の視点で新たな価値付けを行うことで取組の充実を図っている。

- (5) 環境教育は、新学習指導要領において「持続可能な社会の創り手の育成」を目的としており、小学校では、「環境に対する豊かな感受性」「見方・考え方」「積極的に働きかける実践力」の育成が求められている。各校で育まれた力としては、「環境に関する見方や考え方」78%、「環境に関する感受性」56%、「環境に働きかける実践力」33%であった。これらをより確かな力とするため、目指す子どもの姿や育てたい力を明確にした取組の充実が課題となっている。
- (6) 地域や保護者、関係団体(公共施設、町内会、NPO法人等)との連携については、7割近くの学校で進んでいるが、一部で関係者の高齢化という課題も顕著化してきている。
- (7) 環境教育での小中の連携は、清掃活動を合同で実施している1校のみであり、環境教育における小中連携は今後の課題である。
- (8) 環境教育の目的を伝える校長のリーダーシップにより、教職員の環境教育への意識の変化も見られるが、活動が目的化し、環境教育の目的を押さえずに取り組んでいる教職員が依然として多いことは課題である。
- (9) 環境教育推進の課題や問題点、教材開発を含めた時間の確保、予算の確保や教職員の理解不足、指導体制の整備等が挙げられている。

これらの状況を踏まえ、さらに環境教育の充実を図るべく、市内各校での取組を進めている。

3 小樽市の環境教育実践例

【実践例1】豊かな自然環境にあるA小学校

子どもたちの環境への見方・考え方を深める取組
～教科横断的な学習のつながりを通して～

A小学校では、「自然豊かな教育環境を生かし教科横断的に学び深める環境教育」に取り組んでいる。各学年の教科関連表を作成し、総合的な学習の時間の活動を環境教育の要として教育課程に位置付け、教科横断的に活動の充実を図っている。

しかしながら、前年度の全連小全国大会での提言発表を通じて、環境教育における目指す力をより明確にしていくことが新たな課題となった。そこで、教科横断的な取組を通して、教科と関連させて育むべき力を明確にすることと環境についての見方・考え方を深めさせていくことを全校で再確認した。

このことにより、まとめの活動では、国語科の読みやすい紙面づくりやパンフレットづくりなどの学習と関連させて充実を図るとともに、6学年では国語のディベートの学習と関連させ、環境について考え深める力の育成

を図る取組が進められた。

【実践例2】市街地にあるB小学校

「地域の環境に進んで関わり、自分で行動する力」を
育む環境教育の取組 ～地域との連携を通して～

B小学校では、「環境に働きかける実践力」として、地域で自分たちができる活動をテーマに、地域環境に積極的に関わり、進んで行動する力を育むことを目的とした環境教育に全学年で取り組んでいる。

- (1) 1・2年 地域を知り、自然に親しむ学習
生活科で地域を知るための町探検を行っている。また、自然豊かな公園に行き、虫や草花等の観察や採集を通して、生き物に触れ関わる力を高める体験的活動を行っている。
- (2) 3年 清掃活動や市民向け環境保全ポスター作り
お祭りなどで地域に親しまれている川を、地域団体と連携して清掃活動を行っている。また、環境保全のポスターを作成し、地域で掲示するなど、環境保全に進んで関わる心を育てている。
- (3) 4年 地域のお年寄りとの交流
お年寄りの疑似体験や車いす体験を行い、身近な人のサポートの心強さを学んでいる。高齢化社会が進む中、人と人とが関わり合い支え合う行動力につなげている。
- (4) 5年 地域「町づくりプロジェクト」への参加
町内会等の地域団体と連携し、町づくりプロジェクトとして、雪まつりに参加している。町のPRパンフレットづくりにも取り組み、地域環境について考える課題意識と行動力を育てている。
- (5) 6年 地域と連携した「知産志食」の取組
地元企業の「知産志食」の取組と連携し、食を通して自分たちの町を理解する取組を行っている。地元の食材や名産品などを学び、それを生かした料理を味わうことで、地域食材や地域のよさを理解し生かすことの大切さを学んでいる。

【実践例3】地域の教育資源に恵まれたC小学校

「地域や環境に対する見方・考え方」を育む取組
～ふるさと教育との関連を図ることを通して～

C小学校では、海や山の恵まれた自然環境や縄文遺跡等の教育資源を活用した環境教育やふるさと教育を各学年で継続的に取り組んでいる。

- (1) 環境教育とふるさと教育の関連を図る取組
C小学校は、これまでも恵まれた教育資源を生かした環境教育やふるさと教育を継続的に行ってきたが、活動が単発的で、学びに深まりが見られなかった。
そこで、教務主任に指示し、地域の教育資源を各学年の発達の段階や系統性、各教科との関連、配当数

を考慮した上で、環境教育とふるさと教育との関連を図った教育課程に再構築させた。

また、学習するねらいを明確にし、「地域や環境に対する見方・考え方」を育むことを目指すことを重視した活動に取り組んでいる。

(2) ぶどう栽培を通して地域や環境を考える学習

校区は、かつてぶどう栽培が盛んで、「紅塩谷」(現「旅路)」という品種の発祥の地としても知られている。現在では、ぶどう栽培で生計を立てている農家はいないものの、学校では、5・6年生が総合的な学習の時間を活用して、ぶどう栽培に継続して取り組んでいる。このぶどう栽培を通して、地域の歴史や産業を学ぶとともに、気温や降雨量、肥料、害虫等の影響とぶどうの収穫量との関わりなどを考える中で、環境に対する見方・考え方を育む取組を進めている。

(3) 海浜体験学習時における海岸清掃活動の取組

市内では唯一海での水泳学習を行っている学校であり、海浜体験学習時に、全校児童で前浜の清掃活動を行っている。これまでは、ごみを拾うことで前浜をきれいにし、けがの防止につなげる意味合いが大きかったが、今年度からはそのことに加え、拾ったごみの種類や量などに目を向けさせることで、学年に応じて環境問題を考える活動としての転換を図っている。

(4) キャリア教育との関連を図った取組

活用できる地域の教育資源や人材には恵まれているが、それを環境教育、ふるさと教育、キャリア教育と分けて活用するには、授業時数の確保や授業準備等に課題が見られた。

そこで、環境教育とふるさと教育やキャリア教育との関連を図る工夫として、ぶどう栽培では、数年前から地域でぶどうを栽培しワインを製造販売している方を講師として招き、ぶどう栽培と関連付けた職業講話をしてもらう予定になっている。また、縄文体験学習では、地域在住の考古学者を講師に、縄文時代と現代の暮らしの違いを体験する学習を行ってもらい、地域や環境問題を考える活動に取り組んでいる。

(3) これまでの活動を、環境教育のねらいに応じて価値付け、取組を継続することで教職員の意欲を高め、活動の改善・充実につなげることができた。

(4) 環境教育の推進が、地域の教育資源や人材の活用を見直すきっかけとなり、ふるさと教育等と関連付けて取り組むなど、より地域と連携した取組となってきた。

2 課 題

(1) 環境教育を通して育成すべき資質・能力を各学校でより明確にしていくことが重要であり、校長の指導性を発揮し、カリキュラム・マネジメントの充実を図ることで、他の教科等との関連を図りながら、「持続可能な社会」の創り手の育成を目指す必要がある。

(2) 教育活動全体を通して環境教育を展開していくには、家庭や地域、関係団体との密接な連携を図り、地域環境を様々な観点から生かすとともに、校長のリーダーシップのもと、学年に応じた環境教育についての教科横断的な年間指導計画を作成し、学習活動を整備していく必要がある。

(3) 様々な学校課題の解決への取組が求められる中、環境教育が「持続可能な社会」の形成者の育成が目的であることやその重要性について教職員の理解を深め、ふるさと教育等とも関連を図りながら、取組の改善・充実を進めていくことが必要である。

(4) 各学校において、現在取り組んでいる活動のよさを環境教育の観点から見直し価値付けるとともに、教職員の環境教育に関わる資質・能力の向上を図り、取組を継続させながら充実を図っていくことが必要である。

III ま と め

1 成 果

(1) 小樽市小学校長会として、環境教育の取り組む方向性を確認し、実態把握・実践交流を行いながら推進したことで、各学校における環境教育の推進や内容の充実、教職員の環境教育に対する課題意識の向上につなげることができた。

(2) 環境教育の推進には、校長のリーダーシップのもと、地域の教育資源を有効に生かす方向性を示すとともに、校内の組織体制づくりや活動の評価・改善を行い、充実させていくマネジメントの重要性を再認識することができた。